

星の美を紡ぐ一奈良時代～江戸時代 星の美を詠む

Waka of the beauty of stars

●「星」の文学史

意外に思われるかもしれませんが、文学史上、星の光そのものを歌に詠み込んだり、物語に描いたりする例は多くありません。和歌で「星の美しさ」を表現するようになったのは、建礼門院右京大夫（平安時代末～鎌倉時代初期）による作成以降です。物語では『狭衣物語』（平安時代後期）に「靈異」として「星の輝き」が表されていますが、やはり「星の光の美しさ」そのものの描写ではありません。ここでは、「星」の文学史をたどります。

●「月の舟・星の林」（奈良時代『万葉集』）

『万葉集』における「星」の和歌の代表例は、柿本人麻呂による「**天の海に 雲の波立ち 月の舟 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ**」（巻7・雑歌・1068）でしょう。和歌の意味は〈天の海に雲の波が立ち、月の舟は星の林に漕ぎ入り隠れようとしている〉です。はてしなく広がる天空を海にたとえて「雲の波」「月の舟」「星の林」と表現した、ロマンティックな一首です。



奈良県吉野郡川上村にて発表者撮影

●奇瑞をあらわす星（平安時代『狭衣物語』）



東京国立博物館蔵『狭衣物語絵巻』（江戸時代の写）

<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/E0048719>

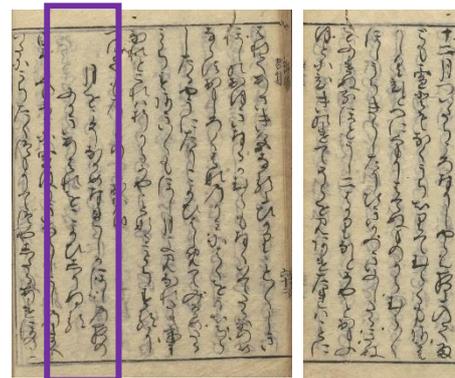
「宵過ぐるまに、**笛の音いとど澄みのぼりて**、雲のはたてまでもあやしう、そぞろ寒く、もの悲しきに、稲妻のたびたびして、雲のたたずまひ例ならぬを、神の鳴るべきにやと見ゆるを、**星の光ども、月に異ならず輝きわたりつ**つ、御笛の同じ声に、さまざまの物の音ども空に聞こえて、**楽の音いとおもしろし**。」主人公・狭衣の笛の音に魅せられた天稚御子が天降る場面です。天稚御子降臨の奇瑞を「星の光の輝き」とともに表現しています。

●星の美を詠む（鎌倉時代『建礼門院右京大夫集』）

「十二月一日ごろなりしやらむ、夜に入りて、雨とも雪ともなくうち散りて、村雲騒がしく、ひとへに曇りはてぬものから、むらむら**星**うち消えしたり。（略）先々も**星月夜**見なれたることなれど、これは折からにや、ことなる心地するにつけても、ただ物のみ覚ゆ。

月をこそ ながめなれしか 星の夜の 深きあはれを 今宵知りぬる

〈物思いにふけりながら月をじっと見つめることはしなれてきたが、星月夜の深い情趣は今夜初めて知ったよ〉。この和歌は『玉葉和歌集』（鎌倉時代）にも入集し、「冬の星」に美しさを見出した作例として評価されました。恋人・平資盛追憶の日々を送った彼女が、星の光をみて、悲しみを忘れることができたひとときを詠んだのかもしれませんが。



京都大学附属図書館蔵『右京大夫家集』（刊本）

<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00031936>

●尼僧がよんだ漢詩（江戸時代『曇華集』）



曇華院門跡（非公開）。江戸時代には京都市中京区曇華院前町に所在した。発表者撮影。

京都の尼門跡・曇華院には、第24世・大成聖安の作品を収めた漢詩集『曇華集』が伝えられています。尼僧自身が漢詩を作成した珍しい例です。大成聖安は後西天皇の娘であり、延宝年中（1673～1681）に門跡を再興した人物です。

「七夕」と題された1編には

「爽爽風高半月輪、銀河一帶見來新、莫嫌牛女稀相會、天上无難報晨」

〈爽やかな秋晴れの日、風が強く吹き、半月がのぼる。ひとすじの銀河が見えてくる。どうか1年に1度の牽牛と織女の出会いの邪魔をすることがないように〉とあります。七夕の夜、天上の牽牛と織女の逢瀬に思いをはせる尼僧の心情が詠み込まれています。